

開催地名	広島県庄原市
開催日時	令和5年8月9日（水） 13:00～14:30
開催場所	庄原市ふれあいセンター
語り部	小寺 昭夫（岡山県倉敷市）
参加者	市危機管理課，自治振興区，備北消防 33名
開催経緯	<p>庄原市は、広島県全域と比較して人口密度が低く、かつ高齢化率が高い地域である。台風や大雨による災害が発生しそうな時、どのように避難すればよいか、避難所に行けば迷惑をかけてしまうのではないかなどの思いから避難をためられる高齢者が多くおられる。</p> <p>実際に災害にあわれた方から災害体験談や教訓を聞くことにより、避難の重要性を認識してもらおうとともに各地域の実情に応じた災害発生時の初動体制について参考にしてもらいたい。</p>
内容	<p>(1) 概要「平成30年7月豪雨」（岡山県倉敷市真備町）</p> <p>平成30年6月29日に台風7号が発生した。日本海に抜けたあと、7月4日に温帯低気圧となって、7月5日から8日にかけて梅雨前線が西日本に停滞した。そこに大量の湿った空気が流れ込んだため、記録的な大雨となった。</p> <p>7月3日から8日までの倉敷市の降水量は294.5ミリだった。加えて市の上流では400ミリ程度の雨が降ったため、高梁川の支流である「小田川」、更に小田川の支流である「末政川」「高馬川」「真谷川」が決壊し、約1200ha（真備町の面積の約4分の1）が浸水した。</p> <p>これだけの被害となった原因がバックウォーター現象である。バックウォーター現象とは川の流れが逆流したり、せき止められる現象であり、真備地区に流れる二つの川のうち、流れの早い高梁川に、流れの遅い小田川の水が流れ込むことが出来ず、逆流し水位が上昇、溢れ出てしまったと言われている。</p> <p>結果、半壊以上の住家が約5700棟、死者51人以上（関連死含まず）と大きな犠牲を出した。なお死者のうち45人が高齢者で8割を占めている。</p> <p>災害後、実際に浸水した地域を調べると、ハザードマップ上の危険地域とほぼ重なった。</p> <p>(2) 時系列（7月6日～7月7日にかけて）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体 7月6日 <ul style="list-style-type: none"> 11:30 第一次非常配備体制。 22:00 第二次非常配備体制（全員召集）がかかり、真備町全域に避難勧告。 23:33 アルミ工場爆発→これより避難を始めたり、避難要請する人も出てくる。 7月7日 <ul style="list-style-type: none"> 01:00 県内応援ボート要請。→ボートによる救助開始。 02:00 自衛隊応援要請決定。（06:00に救助活動開始） 08:00 緊急消防援助隊要請決定。 <ul style="list-style-type: none"> →愛知県、滋賀県、奈良県の各大隊が夜までに到着。 ※延べ2000名以上の人が集まって救助活動をしてくれた。 ・真備分署（当時、小寺昭夫氏が所属） 7月6日

22：00 第二次非常配備体制。（全員召集）

7月7日

00：00 出動指令が鳴り止まない。一般電話で浸水被害の救助要請もあったが、救助要請先へ行くことが出来ないため、垂直避難を促すことしか出来なかった。

00：30 ポンプ車が庁舎へ来るのに難儀するが、途中で助けた市民3人も真備分署へ避難した。その後玄関のドアも開かないほどに水が押し寄せ、職員・市民3人共に真備分署に留まることとなった。

03：30 浸水開始（職員21名、市民3名）

腰の高さまで浸水、2階へ垂直避難。

階段の踊り場まで浸水。

2階の床まで浸水。

06：00 車庫屋上へ避難。

06：45 市民3名、自衛隊のボートで救出。

07：15 職員21名、倉敷署高度救助隊のボートで救出。

浸水して2階へ避難した際、今後の対応に関して、限られた時間しかない中で考えたのが以下3点である。

1. 命をまもる・・・避難ルートを確認する。水位を監視する、体調管理を怠らない。
2. 市民の不安軽減・・・状況の説明を行うことで不安を軽減する。
3. 状況報告・・・連絡が通じた消防局に逐一報告、情報を一本化するため出来る限り同じ職員と連絡を取るようにする。

一時は車庫より高い屋根に避難する方法も考えたほどであったが、想定された5mまでは水位が上がらなかったため免れた。

最終的には庁舎が4.7m浸かり、ポンプ車・救急車・職員通勤車などが水没被害に遭った。救命ボートや発電機は電柱に衝突したり、電線にからまり破損したが、人的被害はなかった。

（3）発災後

1. 住居内に人が残っていないか確認するため、建物検索救助の際に窓を割った住家が78ヶ所あり（施錠で開かないため）、深夜のパトロールが必要だった。22時から26時までの間に1日3回、翌年の2月頃まで続けた。

2. 通電火災・太陽光パネル火災・ガス漏れ等発生、警戒出動が7月5日から16日までの間に101件、救急出動が7月7日から7月末までに536件と通常よりはるかに多く要請された。（前年である平成29年度の真備町の出動要請は月に80件ほどである。）救急出動に関しては、多くのボランティアが現地入りしており、炎天下の中での作業のため熱中症になったり、作業中の怪我による出動要請が多かった。

3. 集めたごみの山から火災が発生する可能性があったため、ごみを積み重ねる高さを5m以下、一山の面積を200㎡、山と山の間を2m以上にすることにより、発火の危険性を大幅に軽減した。

4. 災害の3週間後には、消防庁による職員の緊急時メンタルサポートが行われた。精神科医及び臨床心理士等による1名30分程度の面談を行ったが、幸いにも皆問題なかった。

（4）避難について

災害が起きるとよく言われるのが「自助・共助・公助」である。

自助・・・自分の命は自分自身で守ること。災害を知ることが重要。

共助・・・地域の方々と共に、助け合う。地元に着した組織力が必要。

公助・公的機関による救助・援助。（警察・消防・自衛隊等）

公助に関しては過度に期待しないで欲しい。

人数に限りがあり、至るところで救助要請があっても、そこに辿り着けない場合があることを今回の経験で痛感した。

自分の命を自分で守るため、自分なりの避難計画を立てることが大事である。

また庄原市のホームページに、災害時の「行動事例集」が載っているが、こういった内容を、広報誌やテレビ・ラジオ等メディアを活用して広めていくことも重要だ。



開催地より

消防庁舎水没時、限られた時間、限られた資機材で住民と職員の命をどのように助けたかを説明いただいた。

また、自然災害時「自助」・「共助」がとても重要であることを話された。今後の活動に大いに参考となる講演であった。